

題名
白集
卷





顔題發句集夏部

四月

更衣

春の装とよまひくふ衣え
塩重の表海走日くあふもく
名同哉とあしきと何の文衣
あひと娘持とやうもく
更衣そふの常哉解とまき
あふもく鼻紙と袋持とけり
あふもく似妹のをとまき



蝶夢編

糸貫
嵐雪
露沾
支考
嵐雲
調考
月下

早稲田大学
文学部
図書

雲英木雄
53-7525

神事初日
御新祭
葵祭

御新祭
葵祭
懸心日

孫ぬま

給

衣之入瑞し支物あるを喰走
一松子ぬまを歌ありきりもく
是づく遠子きりり更衣
起くの外あきせし衣之
るぬまや表のふりあけり
孫ぬまやは別て夜着の如く
てしく夜昼一志あり給り乳
給りぬまいさそりりもあけり
一と給り給りたの歌や思来費
人出たぬまの給り衣之

依後 雲給
江戸 百里
宗瑞
登元
木因
千代
涼老
其角
許六
夏一

書後

氣磨祭
葵祭

給出を花さく芥子の一重給
給食のきほひよきりり給り
己位六位色出たふもき磨
を始り焼けや初人着すれ
其の通にのみあけり青紫
ふりぬまは物立ぬまきり
君代やほりふ紫も給りり
あひひまがれぬまは牛の角
酔歌りりあひひま白ひが
并たぬま給りぬま葵り乳

来山
吾仲
丸電
系紫
大和 唯松
老士
越人
言水
未来
乙由

日吉系
千園子
灌佛

日吉系 夏後やきる太子記
その外は桜の實あり 千園子
灌佛や 授子ま乳まき吉の兒
灌佛や 目出交中にて寺あり
灌佛や 躰弱まき 井戸の巻れ
あふの日やつわくま 洗ふ仙とち
灌佛や 我死をなく 子取婆
せし子ま佛とま交つてし
まは夏にせ風 足ま乳
灌佛や 乳まあれも此丘尼寺

湖春
文素
其角
支考
曲翠
荷弓
毛純
源化
助叟
乙由

夏二

花市堂
竿の躰弱
夏公龜
夏花
夏葉
夏影

灌佛や 乞食子 越る 志吉の門
いふ人物 先なき 世の仏生と云
花市も 小僧に 免彈の内 西あり
かくれ家よのくま ぬ竿のつら
まもあへし 石日おのち 敷日と
替へし 故我まき 夏の目
忘つとも やし 系 扱て 八 種 の 糸
夏は 摘み 片 枝 葉 の 乳 ま 揉 れ
まの 心 ちり 一 葉 ち 敷 き 友 志 せ
そ 中 に 登 煮 へ 入 れ 夏 影 せ

治天
馬海
乙由
紀
筆波
支考
千那
如行
山川
葉室
此

煮酒 新茶

酒煮ふや秋衣を茶のくさし
昇身と掃きぬ次への新茶が

未 久風 支考

古茶

祖又祖母の古くも世中へ新茶が
れぬいく古茶かき出たや壺の底

近 文下 田札

風炉

その道より行方れきり風炉の底
疵痕もる兒も思ひり麦秋

浪化 岩舟

麦秋

若くもる秋新茶へ麥の味
麦あまやちまろくもる埃の先

伊 許六 非冠

焙掃の支度くはくや麦秋
麦秋の内も茶衣冷ふさし

木導 里姜

麦秋や立能も疲きたるは
麥味やけりしももれさし

多三

卯の忌腐 青嵐

長島の雲物交出も青嵐は
青嵐さう清き湖や苗衣花

未 嵐雲 煮書 百川

西あらし松の白ひや青嵐は
卯の忌に危き月さかき嵐

加 支浪 丈志

草がりのまにまにり青嵐は
麦の秋や赤い外に月さか

三 麦二 宗因

短夜

夜のつらさのほかに夜の秋の
 夜やうらみ人の秋の秋の
 夜やうらみ人の秋の秋の
 夜やうらみ人の秋の秋の
 夜やうらみ人の秋の秋の
 夜やうらみ人の秋の秋の
 夜やうらみ人の秋の秋の
 夜やうらみ人の秋の秋の

生花
 北枝
 色蕉
 言水
 冰花
 方山
 加藤 菅本
 既白
 未 狸風
 夏四

芋植
 物のり
 青さ
 花の
 牡丹

芋植る所の秋の月
 物のり
 青さ
 花の
 牡丹

星露
 利牛
 芭蕉
 松隈
 希因
 飛葉
 智月
 秋風
 李由
 徐寅

芍薬

はあつり是はと抄ふほらん乳
 芍薬ら子乳益々入る牡丹が
 兼おのほほおまゝのあつらんが
 月蝕の露はあつらん白牡丹
 羨火八潮まで凡を歌牡丹が
 不入古小きく又あつらんが
 是をく小侍の抱くはらん乳
 芍薬やほらんの下に立らん
 芍薬や鶴と牡丹の川ちん
 芍薬より世日の歌あつらん

專吟
 支考
 風弦
 木導
 雲程
 湖月
 礎洞
 蛙
 陂池
 巴静

花葵

あつらんはと抄ふほらん乳
 芍薬ら子乳益々入る牡丹が
 兼おのほほおまゝのあつらんが
 月蝕の露はあつらん白牡丹
 羨火八潮まで凡を歌牡丹が
 不入古小きく又あつらんが
 是をく小侍の抱くはらん乳
 芍薬やほらんの下に立らん
 芍薬や鶴と牡丹の川ちん
 芍薬より世日の歌あつらん

花葵一のり十や笑つらん
 たんにに異は日殺や志河の
 雨の白やつ抱てり加あつらん
 足跡の鶴はあつらんや
 朝く子葉のさつらん杜若
 かきつらんやあつらん
 杜若もへ水あつらん
 約下あつらん杜若

夕磨
 凡兆
 若宥
 可風
 信徳
 沾位
 杏来
 芭蕉
 冬角
 菅氏

玉巻芭蕉
玉巻葛

傘にすれ通りりかき月をこ
まはさこち兼も及ん杜若
ゆんをと持くおるをうたつら
まのそく水滸りし杜若
すれと花のふもむかすも
蓮さぬに是非もおやうたつら
湯のぬく雨の作も加賀川
紫の雨もゆりてやうたつら
青空やと老妓のあまねむかす
聖徳やんまさくあまねむかす

木道
白室
賀枝
宇多那
林治
治毛
休依
文素
和吟
之伴
夏六

一八
茨の花

一八や虫より姉者ひく雨
一八やまあも九寺の花の教
ふくくくくくくくくくく
袖ひく子あの花や花いろ
針ありと蝶よきもんさ藩敵
さくらのあくく茨者蓋りれ
社まはく比丘尼のうもや花いろ
つゆやの壺よ高藤く友子のふ
者よあくと二本はりりけり花
吹ねも死の川友子の力をせは

季覽
深菴
長紅
乙明
乙由
何狂
乙筑
支考
智月
酒堂

嬰虫栗

押合ぬ笑はちりまら女子の心
 青くまら白もゆりけり花
 雷のひきまにちりけり花
 ちりてあつれ志女子の一事か
 けちるや群に誇り咳ちり
 扇髪の日れ也くこと女子心
 き細や皮ほろくこと心ひく
 此のやち似くこと女子の花
 又牡丹母菊葉よりけり心
 けちるく新も心は家にも

舎野
 嵐葉
 蕉笠
 落梧
 近
 神徑
 木名
 卓袋
 林石
 陰夜
 意程
 夏七

風車
 岩波
 躍花
 柔挽草
 卯の花

牡丹より今糸軽し女子の心
 余の心よりいふふの心や風車
 蝶も愛想もふる心風車
 岩波や浪もいさこ及心
 糸見の道敷へまら踊り花
 心ちりて心もけり柔挽草
 くの心やくら花樹虫及こ
 卯の花や山道の馬所のかげ清
 卯花むや里の心むく朝胡
 うの心は月夜と心こら山馬

有琴
 希因
 巴文
 一番
 乙由
 兔角
 芭蕉
 之角
 扇外
 夏七

若楓
首の花

く秋の麦葉よちる垣根が
卯の花の籠るくくん雪の川
外白り霞かこもるお木垣
ふのまればあらひの夜は
卯の足やつふとあつ枝のあり
あつたりにかきあはれく首乃志
くく楓葉色よあるも一さく葉
子規ゆめを歌りやむく楓
君まきのよおひの初や若楓
かひくく秋あつてあつこのあつ

昌房
冬来
伊賀 曲膝
万平
風麦
蝶麦
曲翠
支考
涼苑
嵐堂
夏ハ

若葉

余の葉をよきも清く若楓
大定も乃く若葉の葉は
あつ葉あつてくくく南あつ
くあ水あつてく若葉也根の先
一葉つ、ゆの園はあつてあ葉
あれとあまひもくあ若葉
くくゆく後の子もあ若葉
あつてあつてあ若葉
あつてあつてあ若葉
あつてあつてあ若葉

可死
北枝
近の 惟花
江戸 外高
江戸 沾着
岩 山塘
岩 呂丸
尾張 寺吟
尾張 清水
蓮之

若葉松

紫桜

桜の實

夏木立

はるごとく八條の末て乃ち若葉松
勢いあわく乃ち若葉松の若葉松
まて花の面出のまて若葉松
紫桜や寺中の入のあまら
まてくもや蟻くまて山はかみ
紫桜や花はくおまてなまら
花とて風とてあてて桜の實
実桜やとて八條の冷ひまら
夏木立中に葉の末れまら
まてくまてくまてかみまて木立

京 松雀
おね 宗園
おね 淇水
おね 希園
おね 琴吹
おね 蝶鼓
おね 若足
おね 一跡
おね 紫木
おね 飛歌
夏九

木下園

木下園

勢の葉は若葉のく夏木立
夏木立まてく木つて不様のま
まてくまてくまてくまてくま
寺の傍まてくまてくまてくま
下園や地味まてくの蝉れ声
下園や梢まてくまてくまてく
山多まてくまてく木立ま
牛の目まてく山路や木下園
傘まてくまてくまてくまてく
夕まてくまてくまてく川の吹

気貫 安枝 希園 帯河 流雲 除風 子春 白尾 古芳 文章

楓の花
 夏山
 夏野

楓の花のあつても粟のあつても
 茂る木やあつてもさうさへはぬの敷
 光りあふふふ山の山の志きりり
 夏草や檐を登りて川通り
 順礼の梅さうりり夏野は
 秣有ふへ枝枝の交野は
 啼きあれ虫のあつても夏野は
 遠の志きりりな山の山
 雲を衣あてそのまゝ夏山
 夏山はさうさへも相の心

如行
 猿維
 木来
 其角
 寺光
 色蕉
 一公天
 野水
 怒死
 其角

夏十

花抽
 美人草
 青山椒
 手鞠心
 松穀の心
 白丁花

相の花好まらぬ尾長智
 杜松針の座もふれ白ひが
 二盃目あつても花の白ひが
 白ひがら青山椒や美人草
 裏つり垣乃及りり美人草
 白ひがら青山椒や美人草
 手鞠心花も枝も動や岩の音
 小手鞠や垣のあつてもあつても
 垣乃及りり鼻つく松穀の心
 さあらのあつても四角はさうさへも花

巴靜
 車香
 岩好
 季吟
 其滴
 乙由
 乙由
 曾北
 一玲

野扶の菰
まかりしたる

舊瓜

藪棧

桜桐の花

竹の子

何の哉哉借くかりんもつる
藪つもたひ冬津の如く葉が
何乃早下りしを吹さげと藪椿
乙う藪は掃もくちるに桜桐の花
蛇の葉は居及寺へまあろのふ
汝れ子や大うとやうとまうとく
竹の子や父の齒もまのり
た希のや符支時の縁をさひ
筍やひきうにぬきと垣の上
竹の子やうけくも傘

乙由

芭蕉

孤衾

其馨

里朝

苔緑

嵐雪

芭蕉

六芳

木導

夏十一

竹の子

篠の子

竹葉

竹の子や志願度ハそら
筆や何おもくぬきと礎をら
たげの子や伸らうてハ款をら
竹の子や留隣よ忍太帝
竹の子やゆへに家とて遊瓜つま
竹の子やまもあれまたのそと
まのの子や独りじと根も起る
清風や伝ふちうと志をた松葉
竹の子やいふもく竹の葉をた

藤守

夕考

桐夕

衣来

末山

以之

千梅

倚亮

芭蕉

支考

山中
山
山

岩梨

落

葵

蓮の浮葉

郭云

於の為葉さるる起尚う乳
 岩前や山の道草忘れんさ
 朝もた岩梨お猿衣足
 夜もまかろる露の露多し雨の音
 葵の露も使りやきつるせりり
 蓮の葉の甘味の中にも浮葉は
 蓮池乃深き忘るる起る乳
 雲中花子あり咲け海は
 月影起る空耳も乳郭云
 有明の池そのまふおと起寸

後川
 山後 任口
 千那
 曾北
 黄山
 朧水
 荷子
 守武
 望一
 宗周

夏十二

海はくおるよや己尺の河也先

深くた才啼く花を帯一

郭云大休系哉り数月夜

おとまは花横もあ水の上

木から風葉つても吹や子祝

村鳥くくせく愛入きり

中へお次程を起る櫓や川

乞宿や何哉木陰り郭云

深くたす鳴や如水のそく傷

り燈哉月の夜ま見おとた

芭蕉

涼菴
 来山
 曾良
 丈草
 嵐雪

杜鵑をくや電符とすなり
 中々其の聲はふあけき三声
 内寄るまにがあらうて誰か風
 その聲はふあけき三声
 捉獲の聲は論かきわたり
 郭公の詩のまじりてふり
 杜鵑もくや日信名を考所
 郭公の詩のまじりてふり
 郭公の詩のまじりてふり

大下未
 尚公
 我思
 枚風
 重以
 木周
 方名
 文休
 助安

院亦や啼喚を傳ふる郭公
 本と其の一寸針をく立に
 保少く其の雲踏をく
 子規をくやちるをく鏡山
 似と郭公もくやちるをく子規
 子と踏ん枕もゆをく郭公
 啼にさく笑はくいふ郭公
 中々其の聲はふあけき三声
 郭公の詩のまじりてふり

立志
 芳樹
 高川
 支考
 向空
 其角
 すて
 浪化
 朱拙
 地坡

此詩のひたの中や子規
あつた支をかり首の時を
おとすは世の世をわが世の改
そのつれは世をいふ形を改云
三和目をいふふあうは海を改
蜀を改わくや木のつれ角指
海を改つれ寸月夜馬の改や先
一和て安城とすふは郭云
はまきくハ二階はあう時を
深くは水も山のつれを改

羽衣 舎飛 丹七 智月 兼石 史邦 望東 万子 松隈 飛香

夏十四

夢考

抑々おの夜ぬくのまゝに
深き夢一和く若月の欠
ゆり歌山を起る海を改
我々のつれを改わくや時を
子規夜を木改伐とすは外
ゆりつれに夢を遠へる改り外
夢や言我へくたす夢を
くくひまや筆教り志と啼
夢や笠あまかひく西月と
空を改ひのあまを志のつれを

乙由 唐元 老士 古山 古芳 勉黄 芭蕉 支考 玄武

老考

カラコウトリ
大和木州三回
カニコ自身は多
雌コト云

凍散名

雪や電うらむれ海の志と啼
く我を淋いのきとかたなる
やうくと出く啼と起布穀
しう起ふお起く家やうん多
啼ハまひ啼ぬハ淋凍散鳥
鉄砲の藝古の釣やかたなる
植捨一山田冬書しかきなる
かたなる我もまひハ起てり
起ぬく人ありの起り凍散鳥
留さけしとまひの起るまひに鳥

糸 此行
色蕉
文州
猿雉
兼光 靴界
氷花
舟井
乙由
近江 赤若
都不覚
夏十六

のたまふ雪うけ啼やかたなる
啼くもは啼くお人く凍散鳥
何方向く起るゆり凡もぬ布穀
かたなる舟も起るの起る何り
起るハまひ書ふ又く凍散鳥
凍散鳥物よはあまの日の起り
えんこやう何と都と答へきり
啼く喚ぬ躑躅も凡もかたなる
中くは身ハ起るくうんこやう
夜啼も何人あり一鴈鳩

希因
伊 麻父
何聲
鳥醉
乙筑
玄武
上慈 雨林
猿愛
采更
江戸 卷阿

方目
旅系雀

舊樹入
青鸞
編輯

啼立く鶯鬼羽喜夜の舟
旅の種乃さうとてせにゆい子
川子啼や贈の言多終
おみあまかしの旅より子
いさゝか川向ひゆりゆい子
く切や渡受て吐も昼の巻
樹登り山の愛れ常し如
青鸞や代うくゆよかいゆり
青さ如や世乃たう起る子苗さ
蜂鳩も顔うけかき松巻上

蛙三
九次
高川
亭子
北而
鳥朝
巴静
准鴉
正秀
松蔭
夏十六

乙養

蜂初券

蛭取
蛭刺出

蜂編り子ゆきとくし油賣
かゝりや遠つく種或あま
蜂鳩や花すたぬ瓜を
のほりや故書う故あま立水
乙養もも我よのりて我さ
麦芒葉の家くやうん土鴨
初蜂や背巾をかんてゆか
と川蜂や梅雨の晴り羽あ
越ひやまのり新の端り入
蛭刺出や通りの絶くま屋中

北枝
星推
吐月
其角
智月
杜若
孟遠
浮流
南畝

協の子

蟻取協

子子

飛蟻

蟻

協の子や第の皮よる此抄の
協の子や糸引習ふ跡老松
子起や蟻取協の力信らひ
ほりや水の川糸のつくさ
海ありや起うへ蟻水うら
枯さうし指すかへと相候り
やうくけせう引くま羽蟻乳
這おとこふや下の蟻れ如
抄事なま川く起る蟻
飛のくまふん歌やひまへる

妻波 朝井 史邦 気害 蝶夏 芋魁 素法 芭蕉 曲翠 芦木

夏十七

蚊

蚊帳

月代をきく支立り蚊の物
蚊のひし月本初音の墨うら
蚊のあや行のふまは海夏口
山道の蚊も昼中に喰ひら
交尾の蚊のちいさく飛走ら
血蚊のけいふと忍後蚊の情さ
おのくし筆のうらりよ蚊蚊乳
蚊のあや喰も先う蚊乳刻
やうく蚊涼く蚊の蚊帳乳

菅菴 猿稚 雪草 去来 芭蕉 文草 二水 可電 踏走 不玉

生襖

歌

約そ免く紙巻の白ひや二三日
綱下へ糸魚の勢ひや紙巻の
約おく紙巻并りる五月夜は
遠慮我生さくむらん初月が
小夜にそ鳴らぬみのを鑑らり
大勢の中へ一本か何かくれ
川色乾草我近き紙巻つな
地裁さう紙巻とひびけく鑑奏
飯すくや糸の廣葉の折うへに
ゆよりゆきさくすは一夜紙

浪化 音所 言水 芭蕉 風吟 嵐亭 沈足 曉臺 木岡 伊賀 泉次 夏六

麻の袋角

凄うぬ石の枕や一夜ま
あちぬ折ひや麻の袋角
秋けく折きく蒸衣袋つ
牛の子まらへん麻のぬくろ角

宗陽 小 伊賀 近之

五月

高蒲

志ま尾の長巻くよ高蒲が
あちぬ袖とあや先の白ひは
巻根まよと並ひて着く高蒲が
内裏へよ巻まらへん高蒲が

嵐亭 秋卷 高蒲 撫堂

蓬少く
高蒲酒

洞窟戸極み色まらぬやめり
川筋の蒲葎吹きり流の所
我者やはお殺とくぬあや先
あや先少くおぬま日知の目利り
葵残る高蒲やおの朝の妻
切りり沈の水り川あや先が
泥足の京くかちくや高蒲妻
何やの少く朝や朝妻多の産
著てお産生の者と来にりり

笠下
曲翠
涼菟
小春
介我
乙由
楚璞
腰山

夏十九

高蒲酒の入口
糸の以母見結
七の先御の屋
掛白之

高蒲酒

殊向を沼よ割とる高蒲酒
お湯うら似味もぬ高蒲酒
さう高蒲酒を金と紋のひ双玉のひ
一刀刀老入高蒲酒丸節
高蒲酒のたぐいに高蒲酒刀丸
糸玉や焼の花老ゆぐ返
く糸玉や髪簾の葵ハ糸の危
去先お髪流り女子く平地赤
文もぬり口とく割一糸已把
限糸の産糸らりり一解糸

之角
言水
右花
見推
言水
担色
嵐雲
出野

五日 白門戸
 賦 立甲兵
 器 飾 八
 後 術 術

加茂競馬
 業 摘
 競馬 是 掛
 外 醉 日

定致の破風より並み如後の利り
 きのの境張細工ありす世世に
 加さらにも後より見せぬ甲うれ
 百多や見えぬ女名も高様
 競る見きりりやる多様の味、那
 毛の危やるとの競りり見定い
 七波の外波紫きり口之そへ
 高きうううに用い川や足掛
 塔のくも外掛る日と義と笠
 外掛るべき堂と名業と借人

孟遠 披長 子胤 巽雲 朱迪 氷花 許六 嵐音 芭蕉 以之

懺

羅起まの女子の習ふ程うれ
 百かうう標の中に喧へか
 柱の日の仕中になく標う程
 柱のさして女子の扱うち程
 見下せぬ青葉よあし懺乳
 雲乳と吹くく起世の勢あり
 太正の書あり乳の勢あり
 懺乳の如き予本通まで
 物ぞいさしく地念起りら

越前 吹巻 比抱 聖馬 探志 支考 吾角 松元 松院

又月雨

己月雨也花茂る中の花さくら
さくられや蚕豆のぬきむら
はらうれや色紙をけり壁の跡
五月月や龍の守るをあらう
日と又もたかく異し己月雨
己月雨は何れもまはる淀の
湖もあまはらり五月雨
あましくは三月月雨を己月
己月雨や傘にけり小人歌
はあましくは三月月雨を己月

信位 芭蕉
常牧 亮黄
兼石 去来
其角 尚白

夏廿一

己月雨に花もあまはる淀の
はらうれや色紙をけり壁の跡
五月雨や植田の中よかいつ
たれあまはる淀の雨を又も
さくられや蚕豆のぬきむら
己月雨や傘にけり小人歌
はあましくは三月月雨を己月
己月雨に花もあまはる淀の
はらうれや色紙をけり壁の跡
五月雨や植田の中よかいつ
たれあまはる淀の雨を又も
さくられや蚕豆のぬきむら
己月雨や傘にけり小人歌
はあましくは三月月雨を己月

山姥 孝佐
如行 依是
渭橋 支考
龜洞 亮本
後古 松崎
本意

梅雨晴

こころを雨に誘はるけり
夜を八咫の神に告ぐ五月雨
五月雨や川を流す夜はぬ
夜はぬのやうくやうく五月雨
夕立のやうくやうく梅雨は
雲の雨を流すやうく梅雨は
水は流すやうくやうく梅雨は
霧の雲にやうく梅雨は
川を流すやうく梅雨は
梅雨の夜を流すやうく梅雨は

茶毫
素丸
老士
梅珠
大平
不ノ
不玉
酒堂
史邦
延年
夏北二

梅雨

五月雨

たゞしく春に下つて五月雨
まよひは春を流す五月雨
細くもやうく五月雨
梅の流す五月雨
川を流す五月雨
さしはれ五月雨
夜を流す五月雨
五月雨は五月雨
五月雨は五月雨
五月雨は五月雨

梅志
楚舟
香芝
徳後
香夕
古芳
一舟
残馬
色蕉
元北

虎洞雨

夏月

五月雨は五月雨
五月雨は五月雨
五月雨は五月雨
五月雨は五月雨
五月雨は五月雨
五月雨は五月雨
五月雨は五月雨
五月雨は五月雨
五月雨は五月雨
五月雨は五月雨

元北

花のついでに
論をこころに
花のついでに
花のついでに
花のついでに

花のついでに

志蘇州

藻の花

破鏡のひびきも異し一夏の月
 子の戸も暑き月も取久し
 夜すが秋のそよぐ復た
 川向ひよるる夜更の月
 ゆまや城まきつゝ花のついでに
 志蘇州改む秩宗れ水糸一
 藻の花のついでにすれぬ糸
 つららしく藻の花のついでに
 藻の花のついでにすれぬ糸
 もの花やかたのついでに

北枝 ^{伊勢}
 我峯 ^{伊勢}
 巴辭 ^{伊勢}
 樽良 ^{伊勢}
 等形 ^{伊勢}
 那牛 ^{伊勢}
 北枝
 元兆 ^{尾張}
 胡及 ^{尾張}
 風後 ^{尾張}

藻の花

藻の花

中に子も鹽よれせり藻の花
 そとより月哉とてあはれ藻の花
 一ありは花のついでに
 藻の花のついでにすれぬ糸
 藻の花のついでにすれぬ糸
 藻の花のついでにすれぬ糸
 藻の花のついでにすれぬ糸
 藻の花のついでにすれぬ糸
 藻の花のついでにすれぬ糸
 藻の花のついでにすれぬ糸
 藻の花のついでにすれぬ糸

後君
 哉宗
 氷花
 嵐也
 乙由 ^{加賀}
 若指 ^{大和}
 千代 ^{能登}
 雨麦
 糸代
 山李

土草草
百合

うたまわ吹舟うはく所り候
清つまの宮よひくや時斗草
百合の系たの何もく何く
あや中い火や焼きい百合の系
唯いれやととら下敷結の系
驚き名撲り取くや百合の花
多起くや百合を市く百合の款
とみしや加らう界くや百合の款
紫陽花や敷く小庭のあな花
紫陽花やは黄ま志く世は化

鏡後
対馬
沈牛
花晚
支考

山物花

あまきわ如健きぬ克ま咲直し
紫陽花北下りあや花を川
紫陽花や敷く市り番あ何
眉掃哉西影しくあの花
よやとあふやうあ花やあの花
勝のよとけりもあ花
川東と清くあ花いんあ花
くはあ花の系とあ花
萱草の花やあ花を取く
志くあ花白くあ花を

巴丈
若丸
呉一
芭蕉
涼菖
其苦
能共不知
来山
涼菖
青尚

あの花

草の系

下地の花

石菖蒲

石菖り月の影や朝老下

猿稚

花菖蒲

石菖や若く川原の池の中

既白

金銀花

紫菀花の中は清き水に菖蒲

八采

金仙花

忍冬の花は我れもや金銀花

乙由

空豆の花

空豆の花咲くはり麦の穂

孤至

菜の花

菜の花は片つたはら娘の乳

一風

夏菜

夏菜や夏まはるは朝麦の穂

希同

夏菜

夏菜や夏まはるは朝麦の穂

伯業

夏菜

夏菜や夏まはるは朝麦の穂

光哉

夏菜

夏菜や夏まはるは朝麦の穂

光哉

夏廿五

朝露子

夏菜の花は朝露子

乙由

夏菜子

夏菜子や朝露子

杜若

夏菜子

夏菜子や朝露子

史邦

夏菜子

夏菜子や朝露子

木卯

夏菜子

夏菜子や朝露子

老山

夏菜子

夏菜子や朝露子

荷号

夏菜子

夏菜子や朝露子

秋萩

夏菜子

夏菜子や朝露子

秋萩

夏菜子

夏菜子や朝露子

特産

加賀

乙由

杜若

史邦

木卯

老山

荷号

秋萩

秋萩

特産

蔓
茄子

何き瓜

庭のり地の子哉うんまへり
うんまへり地の子哉うんまへり
うんまへり地の子哉うんまへり
うんまへり地の子哉うんまへり
うんまへり地の子哉うんまへり
うんまへり地の子哉うんまへり
うんまへり地の子哉うんまへり
うんまへり地の子哉うんまへり
うんまへり地の子哉うんまへり
うんまへり地の子哉うんまへり

伊珊
七里
巴静
正秀
胡冬
風伴
半捨
春波
神菜

于瓜
於瓜
南天の花
栗林系
杜鵑花

越瓜の土れ心と紫陰う乳
于瓜わうんまへり
于瓜わうんまへり
于瓜わうんまへり
于瓜わうんまへり
于瓜わうんまへり
于瓜わうんまへり
于瓜わうんまへり
于瓜わうんまへり
于瓜わうんまへり

伊珊
七里
巴静
正秀
胡冬
風伴
半捨
春波
神菜

合欵花

長うぬき哉嘆く如く袖の志
や、夜冬木にも入く御衣花
合欵さくや馬のつりくも躍子

哉中 合行
駿河 馬老
か賀 三四

未楊柳

生胡柳

花栢榴

第木

林の花

花栢

さへ山や入るすもえぬ生らる
さへ雨もあはれや赤まを花さく
第木や女双帯の秋や名を
さへ秋も詠うもさへ雪にらり
たさく花の定家机のありは

北観
飛坡
京 繪水
尾張 蕨交
秋風
夏七七

栢

山梔子

青梅

梅湊

妻起文

栢やはまの社家の名に以
たさ花や志の神あり白ひ雪
かへんらと何あちやるの志を
はく栢の逆ひ川を志の志を
はく栢の志ありくと嘆にらり
青梅や染らる哥れ白やさめ
青妻起の山や女子の塗木履
妻起先や杖をく枝哉情の
交り哉志の種の後さ小梅うれ
妻起文や瓜うさく日の面

江大 子冊
か賀 南流
芭蕉
伊勢 志雪
浮石
万子
江大 木尊
采仲
秋色
伊勢 望翠

杏 枇杷 若併

起つての葉も流るる枇杷
若併の竹をりて根を
如併や若併の葉も流る
若併や若併の葉も流る
如併破るその若併を
一枝もまけ若併の葉も
若併の竹をりて根を
如併や若併の葉も流る
若併の竹をりて根を

瓜流 涼菴 支考 曲嬰 素考 仙化 雲鈴 乙由 千代

夏廿八

併の皮散 田植

死もあけ若併をりて根を
如併の竹をりて根を
若併の竹をりて根を
若併の竹をりて根を
若併の竹をりて根を
若併の竹をりて根を
若併の竹をりて根を
若併の竹をりて根を
若併の竹をりて根を
若併の竹をりて根を

萩人 自悦 支考 重行 吏明 支考 玄梅 許六 乙由 来山

早乙女

早苗

子乙女や子の位方へ括くり
早乙女や起まんとやん笠の奴
汁端は笠の帯や子苗取
子乙女や笠乃やうよ掛ひぢ
雨杉く村中早苗よ子苗
子苗凡そ命の長た公もり
公強おぬまにうましく早苗
苗の色多子編と兜編と一い
田仕巾の中山も清ま子苗
一番と二番も早の青田うね

徳若書
扇指
其角
涼菟
芭蕉
木岡
浪化
落指
李由
曹北

夏九九

青田

田子取

涼きのはれ——田の青々
素肌哉中に青田のそと
草取のそと息つく青田
晴豆もともいづらふ青田
日の入る夕影我く青田
やけ湯を春中に暑く田子取
雷れつうと出りや田子取
草取の笠くふら田の青
控の尻かゝる暑く田子取
笠の想のやかくしう二番草

涼菟
文字
笠道
楚舟
治乞
其角
柳妖
宇白
可風
蝶衣

豆柏
栗駒
螢

豆柏くいつくかん升の巾
栗駒も鶉も乃久ぬりまぬ
螢見や和歌破く先未乳
登乃れそ前赤を螢う那
逢ひ子の泣くつる電螢が
つと野も此表就遠より螢乳
曉を思はば帰るほつる那
夜の交るほと大きの螢うか
田の水鼓えせく螢の泣くが
ふれひと遠より見ゆら螢が

家月
彦元
花蕉
流水
涼堯
尚公
汝村
北枝
万平
三子

挑灯の消くそく此螢う乳
草も木も螢うきと水の音
棄あふく踏あやしく螢う
すといりあは清涼く螢う
水子の音らと乃久くそ螢
刈草れるをよ光る螢う乳
彼き火の煙りそつる螢う
螢火やまにけき清夜の方
ほつるひやまきそ螢う
夜うぬく螢う集るおつるが

正秀
己而
牧童
探志
一髪
許六
怒風
若者
阿音

救急火

子よそ似る子のあしあつら
妻の男へまわすくろく堂丸
消て又何のりある管り船
故やう火やまひひく強後後
魚の骨火海まき北故をり
一まき多標我まふ故遠り
行隅へやうもろく故きか
姑のあふたきくかやう丸
りやう火や小き北家のさく向ひ
りやう火は病へく北故をり船

信法 富田
主 可磨
無事女 信
江戸 百里
我中 方堅
其後 蓮之
一葦
北而
夏一

故拒

我東や細支故やりのひそ北
故拒をまありの刺る夕の那
かきくらよ夏のう北標かきく
故拒やほつれくさ故の月
故まららの標かのと三日の
あは死やまらぬ脊片は立か
去壁とあよ崩さかきく
かきく酒のさく北は遠きり
陰中たや捨る北朝へも北牛
北牛もりあきくさきく北

其 耳考
其角 常矩
由之 其角
牧寺
一朝
凍菟
毛角
如行
冰花

北牛

純 徑

七ふひ八起のあやかろり
露の象北表と見せりり純牛
昔此もよ道教へりりろろり
りりりりりりりりりりりり
牛探り一あーたー純牛
あーれれ角ろろろろろろろ
尺吉神ろ角を出りり純牛
己ろろろろろろろろろろ
何事哉世不書てやあろろ
子取の徑乃血ろろろ純牛

智北
秋至
木兒
素痛
止弦
乙峯
去媛
凡兆
妻波
為有

夏世二

増柳生
控衣ぬく

鼓夷

水鳥糸

増柳の子ふみきてらん風車
谷陰や一ふむろろろ純のきぬ
あーや約ろろろろ純乃衣
杵もかくや着ろろろの夜も
着ろろろろろろろろろろ
鳩の象や雲もかりの足休ぬ
波あえぬ雲わらてやあろろ
雲の脊よたろろろろろろ
鶴れ象やりろろろろろろ
かろの象乃ろろろろろろ

枕山
形徑
曾北
陰嬰
葉耳
荊口
需良
肅山
し
路通

鶉の巣
水鶉

取上るそつや戻まや鶉の巣
吹飛ぬたたくてなま水鶉
足音れ万載たたくあ鶉
木つたり月うてぬる水鶉
吹るまよおしはるくわぬ
雷鼓七つあきききくあ鶉
河をそよゆて凍る水鶉
九十九秋岡ぬあにまかか
枝折戸のかけうあきあ鶉
押さうていぬる秋の秋鶉

松隈
形水
李下
泥去
巴人
高川
吾仲
侍彦
氷麦
文素

夏世二

翡翠

羽枝鳥

鶉川

たかきとゆやの夜を水鶉
と鶉いせ水子鶉あまわぬ
翡翠や羽枝よそりあ鶉
川せまやの書さるあ鶉
追とま枝よあ鶉
羽衣の書えくあ鶉
帯しるてやうてあ鶉
鶉の頬うあ鶉
うつあああ人の目ま
音まき鶉のあ鶉

赤馬
三河
杜若
高川
信
希因
芭蕉
荷弓
信徳
浪化

鴉飼火や重の公と夏の虫
 くの類や結る川を流る上り
 條けの類移通の類や終朝
 十二羽のあれ中なる移通は
 うつゝの我のいあや松子は
 育たつる月見歌あや移通は
 ちのと立を髪と足川の毎
 うつゝのやせまつらうと志は
 石川や染る川村老うは濁り
 染赤や濁らあや終月借ひ

北枝 如行 枕邊 本導 染友 可吟 己筑 以裁 枕邊 伊 配刀 夏世四

重紫お

鹿子 涸佛衣日よせしあふ鹿子が
 矢の下に母れ乳茂の野かたは
 つましも居らる麻の子れ角以
 嵐の子乃あや乳の歌や山留
 猪り吹くさあや終りは
 弓杖小弓をさ歌のせりは
 雲をたや尾越の麻の初はら
 小敷麻やあや火串れをあ系
 何一編の如のあや少くむ人上有
 春の末城志はうこく小縁黄

芭蕉 立志 去芳 枕邊 心秀 嵐雪 嵐林 班系 林凡 其角

鹿子

照村

初はら

火串れ

于編

小縁

帷子

辻糸

菱羽織

晒布

かひの初あけぬのやあゆ黄
帷子や帯もさきさき風吹
くくすの軽ひあけく紗乙白
お格梗席子ゆきや辻糸
かひに帯帯かお羽織
吹度よき波つらけく羽織
つ出の帯袋さくさく
揃入名敷の赤きお出り布

六月

配刀

杜若

支考

伊勢
此考か

木欣

乙物

伊後
涼菴

楚由

長正五

氷室

氷餅

一夜酒

祇園會

六月の蜜柑刀ききり氷室
帷子お世帯へ出きり氷室
散あけく海のおまや氷室
氷室おからおまあつ川を
骨折とおませくと氷室
今まきのまきかかひひあ
あけと室と海あけく氷餅
ままのつお解まのくああり
揮くのまきあ者あり一夜酒
月餅や松系あへ入佐山

言水

伊勢
柳吹

希因

尾張
文素

子礼

伊勢
翠橋

伊勢
那苑

老夕

知角

治位

月はこや兒の歌名は化秋
 あけぬやふれ舟のつらきふ
 鷗もまそ引出しり函谷許
 爪の指くつまむら嘉祥
 船きくみ楓のりよよ立らん
 半夏生や那菜のきり休せ
 那小岳の踏とくくすませ
 爰おれ古月の人名入あふ
 病むれ哉昔のやう古月
 雲もたふ雲子清くく富士山

有良 涼菴 雲被 許六 方山 許六 泰勇 秋風 故足 風水

京 涼菴
近江 許六
白川 秋風
出雲 故足
山 風水

富士垢難
 鞍馬休伐
 水每月能
 御枝
 川社

富士あやのりも雪のあふれ川
 舟たりや秋の鬼乃ちり秋吉
 行きりや雪れ夜ぬとのれり
 里へ冬能くあふ御枝り
 冬もそやすあふれつ御枝川
 雲もひ月のひくくや候強急
 念響も帯にちりや古鞍川
 川風より馬帽子かえて御枝り
 松よに魚のちりきり川岸り
 川や川河太極衣板衣裏

立圃 麻父 一窟 夕空 素書 風言 春波 既志 白尾 山若山

形代
茅の痛
驚翁遺言
腐草化虫
暑

形代や男女老若くも
子成つぬ茅の痛をくまぬが
あつて日はまた驚翁の羽をく
枯草のほろりたるはかばか
石も木も眼もまぶる所のさ
約置るゆゆきゆゆき夕夕形
日の園やあつぬ暑も牛の舌
あつぬおわつぬとまの玉所
元山乃ちうら及ぬあつぬ
暑もあつぬあつぬあつぬ

接叟
日向
雪松
卜宅
太末
好春
正秀
尚志
猿雄
夏世

た暑も心熱もあつぬ
小女の帯にくるまら暑も
肩あつぬ子もあつぬ暑も
二三書驚翁のゆもあつぬ
石も木も眼もまぶる所のさ
相の象も埃のゆもあつぬ
二本目の扇をあつぬ暑も
驚翁のゆもあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬ

九段
き角
それ
西田
秋風
孤老
虎堂
風園
毛純
波村

夕立

寝るころと枕をうへに雲を
ほつくと散らす川に暑さ
髪留れとくまの髪を位存が
あつた日やうめいを通る杖
うつく加や休む人々を暑さ
河原や枕をうへに散らす
ふりやひりくともむねのあ
夕立に走り下るや休む人々
白雨よあつて月や雲の上
ふりやあつて川に下流をえ

細石 ^{のり}
雲蔽
後者
免士
玄駈 ^あ
徳友
孝由
丈草
免賈
夏正八

夕立や波ひかきさる古木を
ふりやあつて川に暑さ
あつた日やうめいを通る杖
夕立よあつて月や雲の上
ふりやあつて川に下流をえ
白雨よあつて月や雲の上
ふりやあつて川に下流をえ
由あつた日やうめいを通る杖
夕立の田畑りかきさる古木を
夕立や川に暑さ
夕立や麻の白ひかきさる

千角
史邦
松橋
僕鳥
許六
岩種
心秀
徐寅

雲の峯

夕立や池のすゝこの朝一丸
ふもや朝う溜く一まゆ
白濁よ家侍しころを食ら
夕立や尺三乳鯉の眼さ
ふとんの梅子れちふ夕立
松やちや入やくら娘海の上
ふもや夜城洗く月ま
夕雨や大休系をけし歌書
夕雨や丸替ふ歌あやうる
登めりの漫るまもや雲の峯

尾 清心
紫貫
巴風
去芳
千梅
伽涼
一系
康工
洪九
周指
雲九

照まけて夕立雲の崩まら
雨の峰あふ丸の崩して
雲の峯何も出れて消はら
那社より太鼓おらり雲の峰
雲のまのまにふもや丸の
那ころのかくちんく雲のね
ふもやのまや芳根を命を根
鞠はやあなはあまの
舟入者 福り笠や雲のま
夕立や丸替ふころ乃嶺

猿稚
免費
方山
北枝
相雨
歌書
許六
涼菴
当吟
去来

去用子

一子子為死聖末や去用子
夜為我為て何てん去用子
體看くつん大光さん去用子
去用子一屏風八事り置所
虫はくや扇杖ゆゑも桜花
斗りや大道七海ま業種店
去用子や三子奈老一何り
虫子や嘘の子物か人が扇
中人を振動んころ去用子
虫何やらふんくく我まこ

許六 其角 去来 狐伴 尾海 卜枝 野波 伴好 此若家 宗陽 得牛 風伴

扇

そと風の二万枝ゆく扇は
日南川行歌思ま扇う那
さる人の故刃対う歌扇う乳
いあまよ二本出らる何あ歌
扇てはひあけく尺う歌扇が
尺挽のたよりつふああ歌乳
と扇よ破ゆゑのうも己が
李良意りやの都也風そや
一いつあふひくあさや意業
色い糸よ巻れやんま園う乳

一象 一笑 尚白 周氏 猿紐 蓮之 許六 袁立 寸長 己筑

園

行拭

日傘

掛書

簞

休婦人

解おいに持て敷行ぬふ
行ぬふ小松ようけく仲は
我白ひあはれとて行拭
梅子すくふかかてて日傘
障おき春の古多知日傘
うけ書や公と記せく山邊ひ
書ら丸人たひく一記書
窓たうりに屋探の夏や簞
飛うらて屋冷さてもたう
空探の鳥ふも去ひや休婦人

千那

嵐亭

出羽 風和

信後 方堅

南月

長門 素道

先放

北赤 色蕉

希因

夏四十一

抱簞

簞枕

涼

抱いこく涼さうさう休婦人
抱簞や夏も涼し中さう
抱かこや思ふ公書もあま
月影のぬく涼しや簞枕
すくさや夏もぬけや簞枕
涼しきや念ふかう八日歌
入歌のちうやと涼し舟の中
去くさや舟に船歌のちう髪
すくさや牛の尾あうて川の中
涼しはや休婦人の藪つこ

信後

吾年流

山行

吾来

利合

乙由

去来

涼菟

其角

万平

才残

すくはちや縁うり是哉あつ下
 涼き如埃よほくうふ休の枝
 空くまわ風を川船の帆あし
 帷子の脊中ゆくう風き
 涼き哉あつが君きくら水車
 すくはちや縁うりくぬの書
 櫻かけく中涼き交陪子が
 涼風多目出交時を名公うれ
 すくまや等にいりく約の糸
 空くはちや縁あつ百の船りあ

支考 卯七 正秀 傳門 木周 一有 酒中 寺子 標良

夏四十二

風薫

納涼

涼きや夏あつさせん是れ
 空枚哉あつてや風のうぬうき
 片波わ風のうぬうれお松子
 何かあつてくその下巻る巻
 松陰より入川ありれ涼き
 さくまよ山橋を回つてく
 破風のよ日影わくく夕涼
 夕涼よくそ男にせしり
 秘座をわくく一交涼き戸は
 夜きふや白ひの夜き月き

秋瓜 芭蕉 徹士 地坡 来山 芭蕉 松涛 去芳 里圃

赤水

つ立ちく帆よりあり神や涼と舟
常しん中哉出ゆく涼と舟
唇に雲つく穴のすく見れ
中男れ城を見て見るの在る
夕涼とゆふの川見野より
果てて幾命もつけ夕涼と
日枝下りけく暮る夜や涼床
今拾と休にありあらしゆの涼
松の葉もいと巻るふとく
水赤や緑も花も流るゆと

文子
遊刀
千那
木導
乙由
老士
老元
柳和
子代
き角
夏四王

清水

赤水や故の赤くも数休の限
昔小車流れゆく通る清水が
きれ梅は遠とよ清水が
ま川よの昔志ありし志も川が
る柳枝と雲より通る清水が
高念佛中も涼る清水が
引立ちくもたのまふ志も川が
雲影の白ひくもまふ山清水
松の葉に雲のかさる清水が
小川もあらしゆく川が

巴風
荷兮
芭蕉
猿維
地徑
丹波
翁扇
濂月
相之
一道
尚白

菅水のほりてけり清水が
 連あまて傳せくむまふ清水が
 妙なるまゝ入らるる清水が
 桶あまて置て留るる清水
 征おろく六部あまて清水が
 けり井やや庭うらまゝ人のあ
 ぬ井やや置かまぬ人のあ
 ゆるまゝや敷き入ぬ麻地酒
 清達の水汲よきまゝてん
 順礼のまゝ木のかや心太

尾張 徐眞
 美濃 文深
 美濃 芳斗
 美濃 心堅
 美濃 風朝
 駿河 相雨
 美濃 葉府
 美濃 一招
 美濃 芭蕉
 其角

四神子約の遊上やまゝてん
 雲の系裁すまはまゝ心太
 ぬるまゝの桶の枚まゝあま
 七さゝるまゝ水にも角やまゝてん
 玉川まゝいゝまゝけり心太
 すゝけり菅の色も水葉碗
 葛水やまゝあまてん
 切麦や清り敷敷とあか見
 冷麦やあまてんまゝ拾あま
 ひわ汁や練りた、まゝあまのま

伊勢 秋之坊
 美濃 園室
 美濃 屋元
 美濃 貞佐
 美濃 信後
 美濃 巴辭
 美濃 系解
 美濃 支考
 美濃 箕十

葛水
 切麦
 冷汁

水飯 于飯 菱切菜 香齋散 深取 子桃 楊棗 李 林擒

水飯や粉公と乳飯のこしん
于飯や花きやく朝のつま
菱切菜壺のるや菱花玉
山水より信りちるに香齋散
木のまかり光る銀やうり散
楊棗や千種併や名にる由枝
ありのうらねりうる落き李う乳
より取も林擒と軸て西ふり
吳し乳頬り喰つく林擒り

丹後 百尾
薄し 穀
重頼
舟休
芳菊
哉菜
孫香
之角
太音
夏四十五

乙葵 百日如

又しる百日如者から先乳
ちれも咲くくく百日如
百日如ふふもさるはあけは
なすくこのをかりさる吳し
授子と川あに吳のわけりさ
る井や孫婿とてる家の玉
授子や呉も呉も花のさめ
は川しや蓮よりぬれみる公
嘆の目成さるもやまの志

温故
千代
未
麦
将
免
許六
希因
洲春
乙卯

蓮

瞿麦

包ちぬ水とのひる蓮う乳
佛光起く公置るる蓮う那
蓮の心折りしう那の蓮介之
ちちけや後から物蓮の心
ふ成流の物折にちぬ蓮の花
勢の中いもくや外く蓮の色
極糸の唾やうく蓮の花
蓮の心ちぬあへ礫の中骨
起くり人あ笑は蓮の花
蓮比やけき物折の心ひし

形坡 秋宅 支考 折風 後吾 以之 杜亮 柳若 可風 伊屋 松葉
夏四十六

浮写

何骨

麦の花

専菜

ちぬ蓮や糸の骨と心折れ
浮写と田子の救り引きり
何骨やけきりて蓮うあれ候
何骨の一輪つとれたすくく
麦咲く軽喉後見さる入心
鳴の桑枝抱く咲や麦の心
引かへに心の起ちぬ専菜が
専菜やあ枝を乳とく水の味
病ちるあぬあいのむれ乃上

如行 素手 伊屋 随友 大和 一衣 乙女 守中 尚心 正考 骨北
形坡 秋宅 支考 折風 後吾 以之 杜亮 柳若 可風 伊屋 松葉

出雲

ふしあきや貝取出又と雲は

龍角

蘭の花

水産り死たる海苔のそと

出筋

藍川

藍かりや強の双きた

風象

鉄線忌

子川の強そこあふ鉄線忌

乙由

山伏子隠居や垣り鉄線花

燈元

眼皮

釣鐘草

花との釣鐘草の高れき

凍蕊

釣鐘草後まゆる名あはし

裁人

凌霄花

のそんや拙と名あはして

希周

長平七

蒲の種

蒲の種やあきかたつら

舎飛

踏草

踏草不や子太の抜て

可堂

虎の尾

踏草や中かの一羽立ち

素道

風葉

風葉あかぬかりや

希周

凡蘭の高も玉葉のそと

文雅

風葉下下に香れぬ

乙兒

きなりや雲水持し

臥高

撥実珠や系我扱さげ

三伍

日さからのふや涼し

香舟

雪の下

玉簪

詩伎

射干

紫菀

青兔肝

赤子

麻

小角豆

陰也くそをりれ海やまの
ひあふれや御陵一いさう
松麻あかたれ鏡子のかきか
花やをり実やら麻く紫菀を
兔肝や青いもろく毒い海
赤子や夕日に赤た水た衣を
あけかろ麻あ直た一西の
あふのきあかたれさくく麻
麻からて死すれ通る小角豆
たはてぬきし急の乳まきけ

初鬼 風子 希周 去仲 昌房 重厚 配刀 強通 斜嶺 痲弱

孫の花

去桑瓜

孫の花たましくさあま似くろく
足り射のまきかひわ孫の花
宵いさやうあまかたれさく
初去桑堅まやん輪にや世
我ま似乳二のまろく去桑瓜
水かた今あまを凍去桑瓜
瓜の皮水も地まよあまろ
さ川瓜や東海を城一か死
むふ墨の初はく乳ま去桑瓜
瓜むまや男堅まろ輪ま女

素巻 巴水 周雨 芭蕉 游刀 其角 支考 猿鉈 立吟

お持 渡坂

南風
夕顔

九つ葉の花を花てんま葉
ま葉をくもを涼いま葉が
南風のありにいつまや芽の形
ゆらぬや破く歌もままの元
折ぬまやをまの目めく
夕顔よりまの葉を刺えが
夕顔や淋くすこい葉のま
火のぬやまの葉一ままの
夕顔や一丁のまま夏豆敷
折ら歌のままくく青の園

巴静
蝶夏
遊水
色蕉
そ角
一笑
将花
去来
許六
三惟

夕顔のまの葉を人のまのま
ゆらぬのまの葉は榊のまのま
まのまはまのまのまのま
夕顔のまの葉はまのまのま
夕顔のまの葉はまのまのま
折ら歌のまのまのまのま
夕顔のまの葉はまのまのま
ゆらぬのまの葉はまのまのま
まのまのまのまのまのま
夕顔のまの葉はまのまのま
ゆらぬのまの葉はまのまのま

飛水
尚白
当吟
乙由
、
紙書
可風
百朋
智泰
松吾

登歌

登由や西ふた長云のぬ
登歌や一夏山伏の巻つゝ
ひる保の忌わぢのあか時
被子花の結のつづく所
登由や牛の登草と遠う
登由や地うのあもる食
ひる歌やの里くまきまの上
ひる保の西つよきと登歌結
登由や扇の塩哉くはみ
登由や籠の中はけしる

登月
支考
細立
治云
不有
也有
玄武
千代
乙筑
冬季

楮の花
神雲花
雲雀鶯
蟬

ひるぬわいそく異さの鬼ふ
登歌や嘆くくとまき通る
山中やうその忌よ弄せん
啼ぬとあつて泣くか除雲雀
杖子フリ風哉入る如ひたり
やそ死ぬけけ及んむ蟬色
あし出り喜にまねけり
遠うは木よむや蟬の
森の毛と涼支那や異ふ声
空蝉とあつて鳴か仕未

法九
出牛
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由

宣蟬

北枝のふた羽言涼しや枝の蟬
蟬の羽を採くあけぬまの枝
蟬のあまふまをまの仕道り
はらうつらむやうく蟬のあ
んゆると一日鳴やもくべ急
いぬはあもかきく蟬の声
抱く木をまもれま蟬乃如
我ひまも暑あやうくせしはあ
あにまの法をふてや蟬のか
目のまを取く出ら蟬のう

北枝
高川
支考
徐風
小春
木宛
可風
文春
出芳
山高

夏三十一

夏虫

蠅

夏虫の大蚊取はまをたき死
すれまの蚊はまをまの夏虫
いふもてまをまの蚊大取虫
すれまの蚊はまをまの夏虫
蠅あまの蚊はまをまの夏虫
まの中へ蠅はまをまの夏虫
まをまの蚊はまをまの夏虫
まをまの蚊はまをまの夏虫
まをまの蚊はまをまの夏虫
まをまの蚊はまをまの夏虫

我峯
昌房
那風
閑更
千那
等水
救毒
九草
免士
葉秀

又去

納

毛虫

重龜虫

川將

始れけり夏去誠を雲の如
系法もあきけり之乃山事
ににせんゆきの細道小雨
負しれぬれりあき毛虫
踏付く物もよひく毛虫
手動ふ心去を去りて去
川うらや葉かぬけり
川かや習まそく月味
川物也一日習小巻の葉
川らや伊勢武者ひら赤禪

冬角

廿七

秋

凡意

け風

秋

休巷

杜若

巴静

巴弓

夏去

精約

海月取

沖能

夏瘦

秋近

川かや上下の志ぬぬ
精約や海路我出て并世帯
精つや不知火あきぬの上
簪式押も眠そそく海月取
漢を身入るの糸や沖能
沖能去りてや風も増加減
夏瘦や尺ぬらにの巻地
あ川や習や蛇きく泳めり
煉土り此心のもろや
秋子り英そかりて

立和

曾北

際夏

丙路

言水

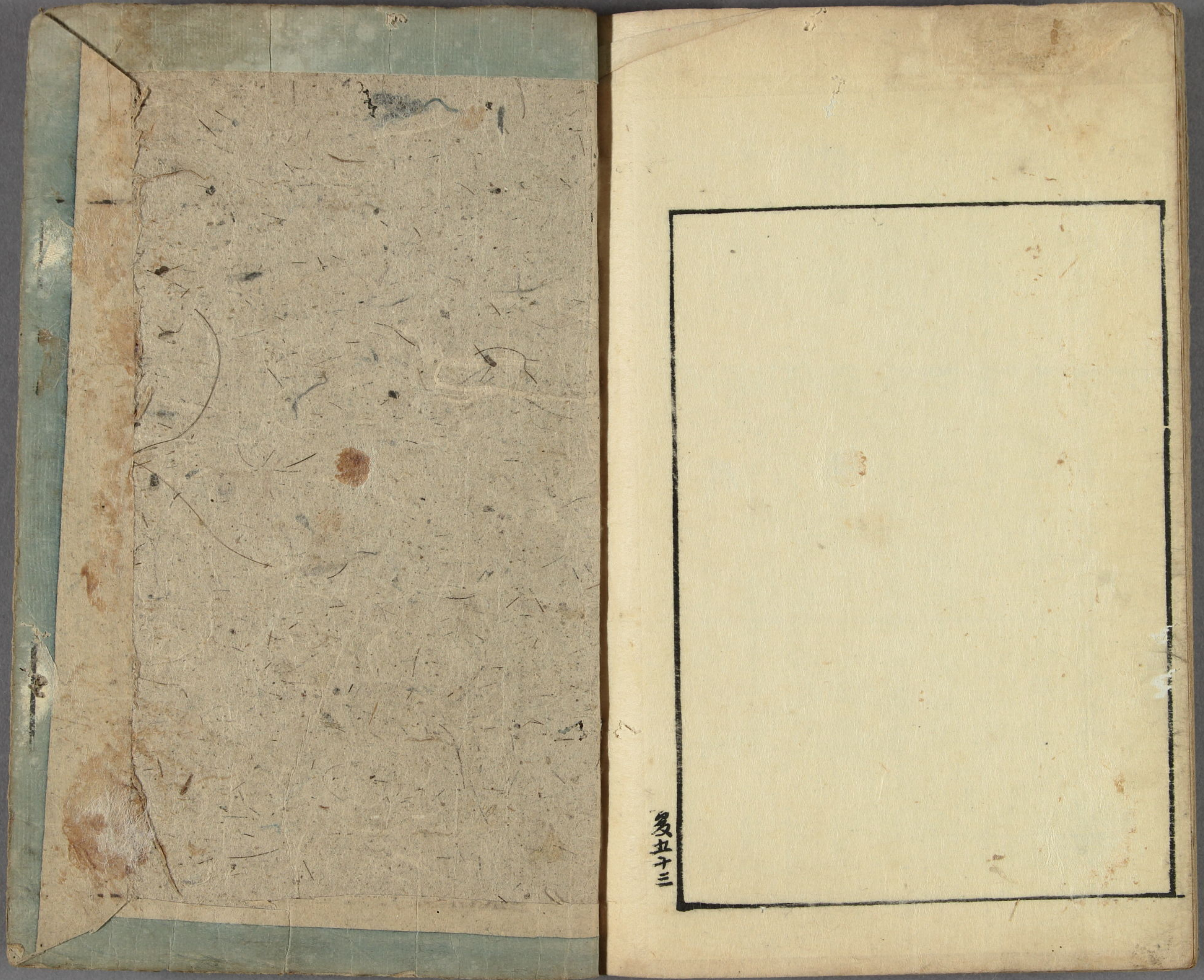
隆己

友静

凡意

芭蕉

其考



五十三

